

卒業式の日言葉

平川 信幸

(大学院文学研究科文化財学専攻 平成14年度修了)

別府大学に人より少しだけ長くいたので、色々と思い出には事欠かないのですが、卒業式の後の学科の集まりで仲嶺先生のお言葉はこれから社会人として外の世界に飛び立つものには重いものになりました。

私の卒業した年は2003年3月20日、思い出というにはあまりにも早いですが世界史的に見て大きな出来事と重なりました。イラク戦争です。卒業式の当日、普段よりも少しだけ早く学校に向かい、同じ学科の友人を見つけて近況を軽く報告し合いました。郷里に帰るもの、大分に残るもの進路が決まったもの、決まりかけたもの、まだ決まっていないもの。おそらく、どこにでもある日常的な光景だったと思います。無事に卒業式は終わり、学科ごとに集まることになりました。その途中だと思いますが戦争が始まったのを知ったのです。やっぱりといった感じで聞き流しました。9.11以降、戦争に関するニュースが好むと好まざると多く入ってきます。慣れというものは恐ろしいもので無関心ではありませんが、これまでの戦争の準備の課程を見ているとそれほど驚くことではないように感じられました。

学科ごとの集まりは、卒業生の数も30人弱だったのでごく小さな部屋で行われました。他の大学のことはよく分かりませんが、別府大学の学生数は多くないので(近年、大分多くなりましたが)先生と学生の距離は常に近く、学生が気軽に先生方の研究室に訪ねていけるような雰囲気です。小さな部屋で行われた集まりは小学校や中学校の学級担任が生徒を送り出すような、本当にしみじみと行われました。この集まりで先生方が学生に向けて饒の言葉を贈るのですが、仲嶺先生のお言葉は大学で美術を学んだものとしての責任を感じさせるものでした。細かい部分をはっきりと覚えているわけではありませんが要約すると次のようなことをおっしゃいました。

「今日、3月20日にイラク戦争が始まった日に君たちは卒業する。戦争は文化の反対側に位置する。君たち、文化財について学んだ君たちが卒業するこの日がどういった日なのか考えてください。」と(その数週間後にイラクの博物館が強盗に襲われ、多くの人類の遺産が流出したことは記憶に新しいところです。)

美術の世界は一見すると作家とごく一部の周りだけで完結していて一般の人には馴染みづらいようなイメージがありますが、創作する人、鑑賞する人、そして護る人がいて社会の中で初めて文化としてなりたつものだと強く感じます。1999年だったと思いますが美学美術史学科の記念事業の一環で、以前別府大学で教鞭をおられた名取先生が講演で「美術というのは戦争や何かあれば一番真っ先に切り捨てられる、美術が学べるということはとりあえず日本が平和であるという状況である」、というようなことをおっしゃったことが強く印象に残りました。バブルが華やかな頃、地方でもメセナと称して公営の文化施設やミニギャラリー設置されました。しかし、現在その場所にいくとリサイクルショップになっていたり、シャッターが閉まっていたりします。「美術」が真っ先に切り捨てられた結果を目にすることが出来ます。あるジャーナリストは「いわゆる戦争だけが戦争ではない」といっています。

大学で美術を学んだからといって作家や学芸員のような、美術に関係する仕事に必ずしも就けるとは限りません。しかし「文化財について学んだ君たちが卒業するこの日がどういった日なのか考えてください」という言葉は胸に強く突き刺さります。作家や学芸員のように美術の最前線に立たなくとも、美術館や博物館に足を運び楽しみながら美術の世界にふれることもまた大切なことだと思います。

別府大学で長い間、多くのことを学びましたが、卒業式の日言葉は最後を飾る饒としてふさわしいものとなりました。